

トピックス

1. 念ずれば夢は叶う！！
2. 玉子の思い出



福留経営労務管理事務所
姫路龍馬会
社会保険労務士・行政書士
福留章

龍馬通信

No. 25

2020年1月号

念ずれば夢は叶う！！

新年あけましておめでとうございます。皆様にはご家族そろって希望に充ちた新年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

さて、私事で恐縮ですが、長年の夢が叶い、現在居宅・事務所として使用している高砂西インタービルを取得し（12月26日付）、今後の業務の拠点として運用していく運びとなりました。開業（1996年、平成8年1月1日）以来24年目の春を迎えて、決して平坦ではなかった道のりを考えますと、万感胸に迫るものがあります。特に前職を言われもない理由で追われるようにして退職。背水の陣で臨んだ社労士試験。合格後、自宅での開業は0からの出発でした。生活の為、近くのスーパーで早朝の3時間、荷出しやバーコードの打ち込みのバイトをして、糊口をしのいだ2年の歳月。それでも家を新築購入したばかりであったため、家計が苦しくみるみるうちに借金が増えていきました。私の人生の中で最悪の時期でした。不安と憔悴から絶望の淵をさまよい、一度ならず死を思い、恐怖からそれさえも果せず、家族に対する自責の念に震える日々が続きました。地を這い、泥水をすすぐような日々もやがて時の経過の中に、とけるように消えていきました。一番の力になったのは家内の頑張りでした。借財はすべて自分の責任と言ひ、時間があればアルバイトをしてくれました。その姿が私を前向きにしてくれたのです。闇の中に一条の光明が差し、開業3～4年目に入る頃から次第に顧問先も増え仕事も倍増しました。

人が苦境に落ちた時、必ず助けてくれる人が現れるものだと聞いたことがあります。その間物心ともに心の支えとなり見守ってくれた人がいました。(株)清光社会長 故田井隆氏、(有)ドライクリーニング京屋会長 故京本宗行氏、みのりヶ丘保育園現園長 岸泉氏、この3名がいなかったら、今の私はない。紙面を借りて心からの感謝を捧げます。奇しくも田井隆氏の長男であり現(株)清光社長 田井隆吾氏のご配慮により、この度のビルの譲渡が実現しました。親子2代にわたる私へのご厚情に熱い涙とともに深甚なる感謝の意を表します。

「夢は叶うもの」多くの皆様のお陰を持ちましてその夢を実現できたこと、感謝感謝の思いしかありません。拠点としての自社ビルを得て、新年の抱負は例年以上に熱く、大きく広がっています。古希を過ぎて2年目。忍び寄る高齢への不安は人一倍あります。私は、母が遺してくれた言葉「章ちゃんは何でもできるがやき」をずっと頭の中で繰り返して生きてきました。「しんどいくらい」がいいと思います。日々緊張が保たれ、生きる目的がはっきりしているからです。士業として生きる決意をさらに熱く持ち、人の喜びをわが喜びとし、世の為、人の為に役に立つことを常に意識して、これからの人生を生き貫いていこうと思います。多くの人たちの支援に支えられ実現した夢、それをこれからはひとつずつお返ししていく番だと思っています。



随筆 『龍馬と私』 ～ 龍馬「学ぶ」ジョン万次郎 ～



ジョン万次郎

1827年～1898年

桂浜の龍馬像は有名である。室戸岬には中岡慎太郎の像があり、土佐湾（太平洋）をはさんで対峙する形になっている。さらには足摺岬にはジョン万次郎の像があり、奇しくも三人の英雄が土佐湾を囲むように配されている。「ジョン万次郎」こと土佐国中浜村（今の土佐清水市）の万次郎がアメリカから戻り、琉球の摩文仁海岸に上陸したのは嘉永4年（1851年）1月のことであった。天保12年（1841年）1月5日万次郎15歳の時、漁師たちの手伝いとして漁に出て遭難し、無人島の鳥島に漂着。アメリカの捕鯨船「ジョン・ホーランド号」に救助されるまで143日にわたって無人島生活を送った。ジョン万次郎のジョンはこの船名由来する。他の漁師仲間たちとホノルルで別れ、一人船長に気に入られ本人も希望した米国本土への航海が続く。救助から1年後、マサチューセッツ州のニューベッドフォード帰港後、船長の家で寄宿、英語、航海術、高等数学などを学んで、航海士となり航海を続ける。やがてホノルルで漁師仲間と合流し、帰国の途に。長崎奉行所で取り調べ後、ようやく許されたのは嘉永5年（1852年）7月のことだった。漂流から11年。万次郎は26歳になっていた。彼の奇跡は一漁師の息子でありながら、漂流という試練を乗り越えて、もって生まれた才能を活かし、幕末きっての外国通として成功をおさめたことだ。やがて土佐藩士に登用。翌年には老中阿部正弘の命で江戸に呼び出され、幕府直参旗本に登用され、中浜万次郎と名乗った。その後万次郎は洋式船建造軍艦教授所教授、航海書翻訳、捕鯨術の伝授など八面六臂の活躍をし、34歳の時、勝海舟らの「咸臨丸」に通弁主務（通訳）として乗り込み、渡米する。不思議な運命としか言いようがないが、その波を見事に乗り切り、幕末とはいえ、直参旗本にまで登りつめた万次郎は、龍馬と同じように土佐が生んだ「奇跡の英雄」といえそう。龍馬と万次郎の出会いは記録がない。同じ土佐藩士であったことから、すれ違う程度のことは考えられるが、龍馬脱藩後はそれも不可能となってしまった。生き証人として外国を見てきた万次郎の影響は偉大である。龍馬は師である河田小龍から万次郎の話の間接的に受け取り、そういった意味での影響を受けたものと思われる。

玉子の思い出 ～初めてののおつかい～

正月特番の中に「はじめてのおつかい」というのがある。4～6歳くらいの子がお母さんに頼まれてはじめてのおつかいをする。さすがに初めてだけに中々ステートが切れないし、途中、わからないことやこわいことだらけで足が進まない。時には中断して家に帰ってしまうこともある。必死の思いで一步一步進むのが健気で観ている人の心に響く。一挙手一投足に泣いたり笑ったり。心配そうに送り出し、祈るようにして無事に帰ってくるのを待つ母親。そして最後の抱擁シーンにはいつも泣かされる。

はじめてのおつかいかどうかははっきりしないけれど、それらしい思い出がある。昭和27年、4歳くらいの頃。自宅からおよそ数百メートル離れた玉子屋さんにおつかいに行った。何の問題もなく玉子さんの店頭立つ。一間間口の小さなお店の店頭には糶穀に埋もれた状態で玉子が売られている。大きさが若干値段が違ってはいたが1個15円～20円くらい。その当時は玉子は普通、1個買いで今のように10個入りのパックではない。「玉子5つ。」ぶっさらぼうに言う。封筒のような袋に入れてくれた。細長い封筒で、初めから5つ目の玉子がはみ出していた。両手でそっと抱えるようにして慎重に歩く。帰り道の途中段々と玉子がせり出してきて、落ちそうになったと思った途端、一番上の玉子が落下。それを拾おうとかがんだ瞬間、もう一つの玉子が落下。3つ目の玉子も持つ手に力が入ってしまい割れた状態。一瞬何が起こったかわからず頭の中は真っ白。当時、玉子はほかの食品に比べて高値で贅沢品だった。子ども心にその大変さがわかった。自然に涙が流れてきた。

家の前で母は待っていた。「あのな、玉子がな、勝手にな、1個落ちてな、割れてん。」「それでな下向いたらな、また1個落ちてな…」泣きじゃくる私から封筒を受け取りながら、「そうかね。そうかね。章ちゃんが悪いがやないき。玉子が言うことを聞かんかったやがね。」「章ちゃんが悪いがやないき。章ちゃんは何でもできるがやき。」そんな言葉に母の腰あたりにすがりついて泣いた。温かい涙がこぼれて母の割烹着を濡らした。はじめてのおつかいはほろ苦い失敗に終わった。私は人生で一度も母親に怒られた記憶がない。いつも優しく、いつも心から抱きしめてくれた。玉子の思い出、それは最期まで優しく母の思い出でもある。抱きついて泣いたあの時の割烹着の洗濯のりとアイロンの匂いが今でも鮮やかによみがえる。